美の仕事

茂木健一郎

～脳科学者、骨董街を奔る！

脳科学者・茂木健一郎さんの「美の仕事」。今回は、昨年末に銀座三越で開催された「無事茶会」という企画展を訪ねました。実はこの催事は柳橋の古美術店・ルーサイトギャラリーが企画・運営をしています。オーナーの米山明子さんが古今東西から集めた楽しい見立て道具たち。そのうちのどんなモノに茂木さんは反応するのでしょうか。

第七〇回
ルーサイトギャラリー（東京）・
「無事茶会」展in銀座三越
フリーベリが私のところに来た。

これまで訪ねてきた古美術店とは雰囲気が異なる百貨店のフロア。モノの見え方もいつもとは違ってきますね。

●百貨店で古美術店が催事を開催

いろいろな国に「デパートメントストア」というのはあるけれども、日本の「百貨店」には独特の文化があるように思う。

例えば、印象派の絵画など、独自の展覧会を催して文化を底上げし、同時にお客さんを集めるという仕掛けが日本のユニークさであり、何回りかして、世界でも先端的な存在になっているように思う。

最近は、インバウンドのお客さんの増加などで、文化の発信基地としての役割が改めて注目されている。

そんな日本の百貨店を代表する存在の、銀座三越。ここの七階で開かれる「無事茶会」というイベントにお誘いを受けた。

主催はルーサイトギャラリーさん。普段は、昭和の流行歌手だった江戸小唄の市丸姐さんの屋敷を改装した建物を本拠としている。

その本拠地のルーサイトギャラリーで行われた「まどか」という催しに以前伺ったのだった。少し早めに行って、よく様子がわからないままにぼんやりと眺めていると、定刻になり、本職の骨董屋さんがわんさかとやっていらした。

それで、私がなんとはなしに「いいなあ」と思っていた器があったのだけれども、それが、開店とともにあっという間にかっさわれてしまうという「事件」が起こったのだった。

中国、景徳鎮の筒茶碗。「きれいだなあ」と思っていたら、小柄の紳士が入ってきて、あれよあれよという間にさっと持っていってしまわれた。

後に、白洲信哉さんが「ははは目つきが変わっていましたね」と言った。その時にはもう遅い。小柄の紳士の正体は、有名なお店のご主人だった。

これが「筒茶碗事件」。今思い出しても、きれいな器だった。

以来、骨董というのは油断のならない世界だということを学んだ気がしている。

今回の「無事茶会」は、同じルーサイトギャラリーさんの開催だけれども、百貨店中の百貨店、銀座

見立ての茶道具を見ながら説明を受ける茂木さん。このときからフリーベリの赤い茶碗に目が吸い寄せられていますね。

三越での開催ということもあって、なんとはなしにのんびりとした気分が漂っている。

しかし、何しろ骨董のことだから、油断はならない。

入り口で、『目の眼』オーナーの櫻井恵さんと、編集部の井藤さんが待ち構えている。

ルーサイトギャラリーのオーナーの米山明子さんとは、例の「筒茶碗事件」以来の再会である。

「これは、刀職人の方が仕事がなくなったときにつくったものですね。」

さっそく、井藤さんの「ささやき」が始まる。こうやって横からいろいろ教えてくださったり、これを買え、とそそのかされたりするのである。

「無事茶会」は、今年で三年目だとのこと。

米山さんの目利きによって、自由な発想で「茶会」を構成する器や道具が組み立てられている。

かつては評価が低かった明治のものの人気が上がってきたり、文化や歴史という文脈を超えた共鳴関係が生まれたり。

骨董や古美術の世界は常に動いている。そして、米山さんの周りには、さわやかな風が吹いている。

本来、一つひとつの器の出自を問わずに、それぞれの個性に基づいて受け止めてもいいはずだ。小さな「ガレ」を配したり、ロイヤルコペンハーゲンのものをアレンジしたりとか、「見立て」は本来、クリエイティヴなものであり、そんな新風を米山さんが起こす。

そもそも、銀座三越にいらっしゃるインバウンドの方にとっては、文脈と関係なくいろいろなものを面白がる精神があるはずで、骨董はそんな開かれたものでいい。

何しろ、何百年に渡って作られ、受け継がれてきたものたちを一つの場所に「召喚」して「編集」するのが現代における「数寄」の精神であるはずであり、本来そこには絶対一つの「正解」などはない。

●モノ好きの原点が詰まった宝箱

米山さんが、まずは面白いものを見せて下さった（一四五頁）。

「たまたま整理していたら、三越の古い保存箱なんですよ。将来、これを茶箱にしてもいいと思って。私の原点なんです。」

見たことがないような箱が置かれている。

「ぼくはこの箱、好きだなあ」と櫻井さん。

中を見ると、「樟脳を使うな」「化学反応を誘発する」などと書いてある。

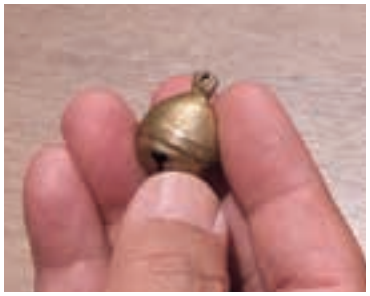
三越の方に問い合わせても、「わからない」というのだという。むしろ「資料室に欲しい」とさえ言われたのだという。

このようなものが、世の中に存在するというということさえ予感していないような、そんなユニークな実在。

ここに、骨董というものの凄さがあるのかもしれない。モノ自体が残っていることによって、たくさんの「情報」がそこにまとわりついていく。

「最初はこういうものが好きだったんです。」

米山さんが、テーブルの上に次々と金属製の器を並べていく。



戦前のものだろうか、「三越」と名前の入った古い鉄製の箱を空けると、米山さんが昔から集めてきたお気に入りのモノたちが詰め込まれていた。

円錐や円柱を組み合わせた様々なかたち。まるで抽象絵画のよう。

「仲の良い骨董屋さんからは、当時、お前は雑貨屋だと言われました。」

小さなかわいい金属製の「籠」

別々の空間にコオロギを入れておいて、闘わせるときに真ん中の仕切りを抜くのだろうと櫻井さんが推理する。

丸い穴が空いた小ぶりの石がある（右上写真）。「縄文時代につけられていた耳飾りなのでしょう」と米山さん。

「これは、鎌倉時代の鈴（右下写真）です。分類としては仏教美術に入るでしょうね。」

手にとって眺めると、小さな栗のようで可愛い。

●フリーベリのうつわ

米山さんによって「召喚」されたさまざまなるものたち。

大切そうに出してきた十二世紀末の天目茶碗。本当にきれい。

「これは、私の原点としてずっと

渋い金属製の茶筒や花器、蓋物がならぶ

とってあるんです。」

北欧の器を天目の隣りに並べる。

「スウェーデンの方々は、陶片を持ち帰って、それを削って成分を調べたんですね。それで、それを再現してつくろうとしたみたいなんです。天目というものに、とても惹かれたようなのですね。」

天目と北欧と。時代や文脈を超えて美がつながっていく。

米山さんは、自分の好きなものと好きなものとの「点」と「線」がつながったときに本当に喜びを感じるのだという。

ベルント・フリーベリの器。やや大きい青いのと、やや小さい赤いのと。

ひと目見て、素敵だなと思った。特に、小さな赤がちょうどお酒に良さそうだ。

「フリーベリって今、とても人気なんですよ。」と井藤さん。

裏返して高台を見ると、何やら描かれている。

「この手のマークは窯印なんです。作家のサインもありますね。」と井藤さん。

井藤さんもフリーベリを一つ持っているのだという。

形そのものは、天目茶碗の厳密な幾何学性をなぞっているようにも見える。

「お互いに影響を与え合うんですね。京都の方が、デルフトが人気だというので、京焼でそれを真似したものもあるんです。いくらでも精巧に作ろうと思えば作れるのに、敢えて、少し稚拙なところを出すんです」と米山さん。

どこの国でつくられたか、どの時代のものであるかということを超えて、一つの世界で共鳴していく。それこそが「美」であり、骨董という「編集」からそんな本質が見えてくる。

フリーベリの器を天目の横に並べると、本当にそこに一つのくくりがあるように気がする。形とかたちが共鳴するように感じる。

●古美術は病気になる

「茶会」ということをきっかけに、集ってくるさまざまなものがある。

上：パステルカラーのうつわが並んでいるが、日本・中国・北欧と産地はそれぞれ違っているのに不思議な調和が感じられるのがおもしろい。右下にある赤釉盃が茂木さんが手に入れたフリーベリ
左：高台内に彫られた手のマークはグスタフスベリというスェーデンの窯のマーク。フリーベリのサインと制作年も刻印されている

米山さんは、引き続いて、今の作家の器を見せて下さった。

二階堂明弘さんの作品。

見た目が優美に薄くて、持った時の質感が素敵である。

現代の作家さんのつくったものも、時代を経て、やがて「茶会」に参加していくのだろう。

米山さんに、この世界に入った原点のようなことを伺う。

「中学校の時に、修学旅行で弥勒菩薩を見て、動けなくなってしまったんです。広隆寺と中宮寺の両方を見て。魅了されてしまいました。古美術は買えると知ったのは大学の頃で、それで病気になりました。」

「資金源はどうしたのですか?」

「自分の持っているアクセサリーを売ったりして骨董を買っていたのです。」

「それは、先祖代々伝わったものですか?」

「いいえ。頂いたアクセサリーを売っていたのです。」

「それは凄いローンダリングですね。」

祖父母が料亭をやっていて、そこで少し手伝いをしていたのも、骨董の「資金源」になったらしい。「田中角栄さんが旗揚げをした料亭でした。」と米山さん。

●フリーベリを手に入れる

そんなルーサイトギャラリーに至るお話を伺いながらも、つい、フリーベリの器が気になってしまってチラチラと見てしまう。問題は、タイミングだ。

頃合いを見て、「これをください」とフリーベリの赤釉盃を指すと、櫻井さんが声を上げた。

「あっ、それ、茂木さんが帰ったら、買おうと思っていたのに」と櫻井さん。

そうだったのか。危なかった。「筒茶碗事件」の再現になるところだった。

井藤さんが嬉しそうな顔をしている。なぜか、井藤さんは私が器を買うと喜ぶ。一方、米山さんの反応は不思議だ。

「米山さんは、売れると悲しい顔をすることもあるんですよ」と井藤さん。

確かに、見せていただいたものたちは、大切なものばかり。米山さんにとっての原点であり、「お守り」のようなものなのだろう。

レオナルド・ダ・ヴィンチが、生涯の最後まで『モナリザ』を手放さなかったという話を聞いたことがある。

「フリーベリは、赤のものはなかなか出ないんです。来月、あれを見に来る人がいたんです。」と米山さん。

そんなことを聞いていると、櫻井さんだけでなく、いろいろと危ないところだった。

何はともあれ、無事、フリーベリは私のところに来た。

安全なところで独り、フリーベルとゆっくりと戯れる。

改めてひっくり返して高台を見る。

「フリーベリ」「1975」。井藤さんが言っていたように、「手」のかたちが描いてある。

私のように、たくさんの人たちがこの器を眺めてきたのだろうと思う。

もちろん、作者のベルント・フリーベリ自身も。

フリーベリの器が、三越の包装紙に入っていることにも不思議なご縁を感じる。

米山さんによると、「千家十職」は、明治時代に三越で開催された展覧会ではっきりと定まったのだという。米山さんがもたらす新しい風と、文化発信の拠点としての百貨店の力。

点と線とがつながって、フリーベリが私のところに来た。

米山さんイチオシの若手作家、土色のグラデーションが美しい二階堂明弘さんの陶器

ルーサイトギャラリー

昭和の流行歌手、市丸さんのお屋敷をリノベーションしたギャラリー。オーナーの米山明子さんのコレクションを中心にした展覧会や以前「美の仕事」でも紹介した「古美術展示即売会　まどか」などの展覧会を開催。隅田川に臨む戦後すぐに建てられたお屋敷のクラシカルなたたずまいも魅力にあふれている。ルーサイトギャラリー主催の展覧会は今回の銀座三越のほか、新宿伊勢丹などでも開催される。

◎ルーサイトギャラリーの今後の展覧会

「民藝」五つの古美術店がそれぞれの思いの民藝を展示販売。3月2日(土)13時-18時・3日(日)11時30分-17時30分

「古美術展示即売会　まどか」146頁でも紹介した意欲的な古美術商が出展する毎年恒例の展示会。3月23日（土）11時-18時・24日（日）11時-17時

●東京都台東区柳橋1-28-8

電話　03-5833-0936

http://lucite-gallery.com/